

氏 名 (本籍)	は やま だい ち (東 京 都)		
学 位 の 種 類	博 士 (心 理 学)		
学 位 記 番 号	博 甲 第 5428 号		
学位授与年月日	平成 22 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科		
学 位 論 文 題 目	友人間における冗談の不達を生起させる要因の検討		
主 査	筑波大学教授	教育学博士	櫻 井 茂 男
副 査	筑波大学教授	教育学博士	服 部 環
副 査	筑波大学准教授	博士 (心理学)	湯 川 進太郎
副 査	筑波大学講師	博士 (心理学)	佐 藤 純

論 文 の 内 容 の 要 旨

(目的)

本研究の目的は、友人間における冗談の不達を生起させる要因を検討し、冗談の不達が生起するプロセスのモデルを構築することである。本研究では、冗談の不達を「話し手の親和的意図が聞き手に伝わらず、冗談の聞き手が怒り感情や孤独感を生起したり、聞き手の自尊心が低下したりする現象」と定義し、主に「話し手が親和的意図に基づき過激な冗談を言う」、「聞き手が否定的感情を感じる」という構成要素からなる現象と捉えた。そして、話し手側の要因として、過激な冗談の親和的意図が伝わる期待を取り上げ、その期待が形成されるプロセスを検討した。一方、聞き手側では、冗談に対する反応が過激な冗談を言う頻度に及ぼす影響と、からかいに対する認知的評価が否定的感情の生起に及ぼす影響を検討した。

(対象と方法)

研究対象は大学生であり、主に質問紙法により研究を行った。本研究で使用された主な尺度および項目は、冗談行動尺度、冗談関係の認知に関する項目、冗談に対する反応に関する項目、からかいに対する認知的評価に関する項目であった。また、冗談行動尺度の妥当性の検討や冗談関係の認知の正確性の検討では、友人のペアを研究対象とした。

(結果と考察)

(1) 冗談の不達について実態を調査した。その結果、聞き手に親和的意図が伝わらない「過激な冗談」として、「倫理的・性的タブー」、「聞き手の悩み」、「外見や行動」、「好きな人や物」に関する冗談が挙げられた。

(2) 冗談行動尺度および冗談関係の認知に関する項目を作成した後、親和的意図が伝わりとする期待が形成されるプロセスを検討した。その結果、冗談関係の認知に関する「冗談に対する被受容感」が、過激な冗談の親和的意図が伝わるという期待を促進することが示された。同様に、「冗談に関する他者理解感」が、「性的タブー」や「友人や恋人」といった話題の過激な冗談に関する期待を促進することが示された。

(3) 冗談関係の認知の正確性を、友人のペア間の相関と、相手の冗談の好みに関する正答数と冗談関係の認知の関連で検討した。その結果、一方の回答者がもつ他者理解感、もう一方の回答者がもつ被理解感と中程度の相関がみられた。友人のペアを対象に、相手の好む冗談を推測して当てるという実験では、冗談関係の認知は相手の好みの正答数と関連がみられなかった。

(4) つまらない冗談や怒りを感じる冗談に対する聞き手の反応を取り上げ、過激な冗談との関連を検討した。その結果、迎合的反応（例：愛想笑いをして楽しんでいる振りをする）と感情表出反応（例：冗談によって嫌な気分になったことを伝える）が、過激な冗談を言われる頻度につながることを示された。怒りを感じる冗談に対する聞き手の反応を取り上げ、その規定因を検討した結果では、状況要因である話し手との関係性と周囲の反応の影響がみられた。

(5) からかいに対する認知的評価やからかわれた状況での自他の認知が、聞き手の怒り感情、自尊心、孤独感に及ぼす影響を検討した。その結果、脅威度の評価や敵意的意図の知覚が、過激な冗談に対して怒り感情を生起させる頻度を高めることが示された。また、からかわれた状況での悪意の認知や演技性の認知が、孤独感や自尊心に影響を及ぼすことが明らかとなった。

(全体的考察)

本研究の結果より、冗談の不達が生起するプロセスのモデルが提案された。モデルには2つの特徴がある。第一は、友人との二者関係において、冗談を言い、相手が笑うという日常的な相互作用によって、話し手が冗談関係の認知を形成するという点である。そのプロセスで、過激な冗談の親和的意図が伝わるという期待が高まり、話し手は聞き手に対して過激な冗談を言う可能性も高まることが予想される。第二は、聞き手が拒否に対する感受性やからかいに対する認知的評価をどのようにもっているかによって、冗談の不達の生起する可能性が変わるという点である。本モデルは、日常生活における二者間の関係性を重視している点で、関係する研究領域に対して新たな示唆を与えるものといえる。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、友人間における冗談の不達を生起させる要因について、これまでのユーモア研究に多くみられる話し手のパーソナリティ（攻撃性）ではなく、話し手と聞き手の関係性に着目して研究を行った点が独創的である。また、冗談関係という比較人類学で提唱された概念を心理学的概念として導入した点は、学際的意義があるといえる。因果関係を一時点の横断的調査から検討している点、冗談行動尺度の再検査信頼性の検討がなされていない点、冗談の場や文脈が考慮されていない点、などについてはさらなる研究が必要である。しかしながら、本論文で得られた多くの知見は、からかいや冗談の行きすぎによって生じる対人的な問題を予防する上で、学術的にも実践的にも有益であるといえる。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。